京都の日本庭園の様式と土地自然との関わり

―― 日本庭園の変遷を少しばかり鮮明にする試み ――

篠　沢　健　太

日本庭園の作庭技法や様式、個別の庭園の経緯についてはすでに多くの研究や議論がなされている。しかし、日本庭園の様式の変遷や、庭園の分布と土地自然特性の関連についてはまだ議論は十分ではない。本論ではより大きなタイムスパンから京都における日本庭園の変遷をとらえ、土地自然特性と庭園様式との関連を示し、現在我々が直面している自然との共存のあり方や自然環境を考慮した計画・設計への示唆を得ることを試みた。

はじめに

大阪芸術大学に着任して4年目になる。着任当初から2年間、私は、環境計画学科3回生を対象とした「日本及東洋庭園史」という科目を担当する機会を得た。前学長中根金作先生が担当なさっていたこの授業を、私が担当できることは、(日本庭園に造詣の深い諸先輩を差し置いて分不相応ではないか、と思いつつも）光栄でありとてもうれしく思った。しかしこの日本及東洋庭園史という科目は、思いのほか難しいものであった。

これまで日本庭園の作庭技法や様式についてなされた研究や議論の多くは、個別のあるいは限られた時代のなかでの議論であった。その理由として、庭園の様式や作庭技法には当時の文化的・社会的背景が密接に関わっているため、単純に相互比較できず、また現在我々が目にするのは作庭後手が加えられた庭園で、様々な時代の特徴が積層されていることが考えられる。

しかし、この「日本及東洋庭園史」のタイトルには、日本庭園、さらには中国大陸、朝鮮半島の東洋庭園を一つの歴史的な流れの中でとらえたいとする意志が込められているように感じられた。もちろん、経験を積んで多くの庭園に造詣の深い諸先輩方には、そうした関連は自明なのかもしれない。ただし、私を含め、ほとんど経験のない学生にもおよその歴史的変遷がつかめるよう授業を展開しなければならない。日本庭園の様式の変化やその要因について、大きな歴史的な流れのなかで議論し秩序立てて説明したものは、後に述べるいくつかの著書・論文以外には、ほとんどみられないように思われた。日本庭園、さらにはその源流とも考えられる東洋庭園の、庭園史的な流れを概論するためには、別の見方が必要なのではないだろうか。

そこで、平成7年度塚本学院教育研究補助費の助成を受け、庭園の様式、分布域と立地の土地自然特性との関連に着目した検討を行った。

1．日本庭園をとらえる視点

1.1　〝環境芸術〟としての日本庭園

日本庭園は、作庭時代の社会的・文化的背景や作庭者の思想的背景のみでなく、土地自然特性にも大きく左右されている。社会・文化・思想によって構想された庭園を実現するために、どのような場所に庭園を作庭するか。敷地選定の決断には、土地自然特性と当時の技術水準が絡み合っている。もし、ある一時代の庭園分布からその

時代の庭園の敷地選定の傾向、つまりと庭園様式と土地自然特性、技術の関連を上手く示すことができれば、日本庭園は、「立地の特性を何らかの形で反映した〝環境芸術〞」ととらえられるのではないか。これが、私が日本及東洋庭園史に対して目標であり課題であった。

1.2　〝環境芸術〞と土地特性の関連を検討する意義

「このような視点では、日本庭園の思想的背景や文化的側面が十分考慮されず見落とされる」という批判は甘んじて受けたい。しかし、庭園を相互比較し、歴史の流れを検討するために、庭園立地の土地自然条件と作庭技術との関連を検討する意義は大きいと思われる。

現在我々の周囲では、大規模工作機械が山を削り谷を埋め、地形を一変させている。人間の営力は簡単に土地自然条件を克服できるかのように思われている。しかし、それはあくまで一時的なものである。自然の時間の物差しは、人間の一生よりもはるかに長く、広い空間を対象とする。我々が変えた自然はごく一時的、狭い範囲でしかないことは、地震などの自然現象によって顕在化するように、自然はなお（我々の目には映らないものの）人間の生活とは無関係ではない。

我々は、こうした自然の特徴や土地条件を理解した上で、共存していく手法を編み出さねばならない。

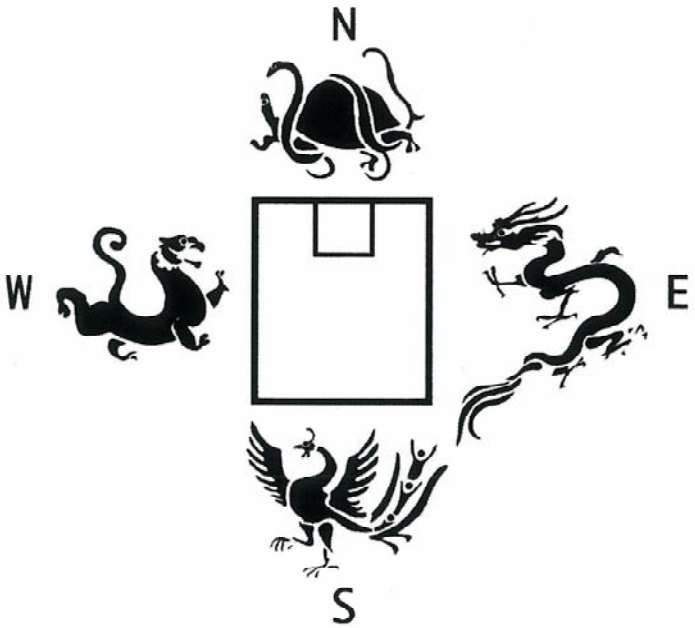


図１　平安京の方位と四神

1.3　研究の目的

以上のような考え方から本論では、「作庭」という人間の営為が、日本の自然環境の中でいかに変化してきたか、という視点から日本庭園史をとらえることとした。したがって、新たな一次資料の発掘という革新的な研究ではなく、既存の情報を再構成し、整理し直すことを目的としている。本稿では十分果たせなかったが、最終的に、土地自然特性と技術、作庭思想や手法との関連を明かにし、それらから現在我々が直面している自然との共存のあり方や、自然環境を考慮した計画・設計にも示唆が得られればと思っている。

2．対象地と手法

2.1　対象地

対象として京都盆地を選んだ。京都は平安時代から江戸時代まで国家の政治・文化の中心として、中国大陸や朝鮮半島などの異なる文化圏と交流しつつ恩恵を受けてきた。京都の日本庭園文化もその恩恵の一つであると同時に、そうした移入された文化を京域内外の自然環境に合わせて変化、適合させつつ、日本独自の文化へと育み培ってきたものである。

2.2　手法

本論で用いた手法は、地域レベルでの環境分析でごく一般的に用いられる、オーバーレイ手法である。異なる主題で作成された同縮尺の地図を重ね合わせることにより、それらの関連を見る手法である。1920年代にはすでに一部計画に用いられているが、1970年代にＩ．マクハーグが地域計画に用いたのをきっかけに現在では世界中で盛んに用いられている。今回は、土地自然条件として地形分類を、一方日本庭園の特徴として庭園様式を取り上げ、両者の対応関係を把握し、その後、既往研究に基づいて両者の因果関係について検討するという手順をとった。

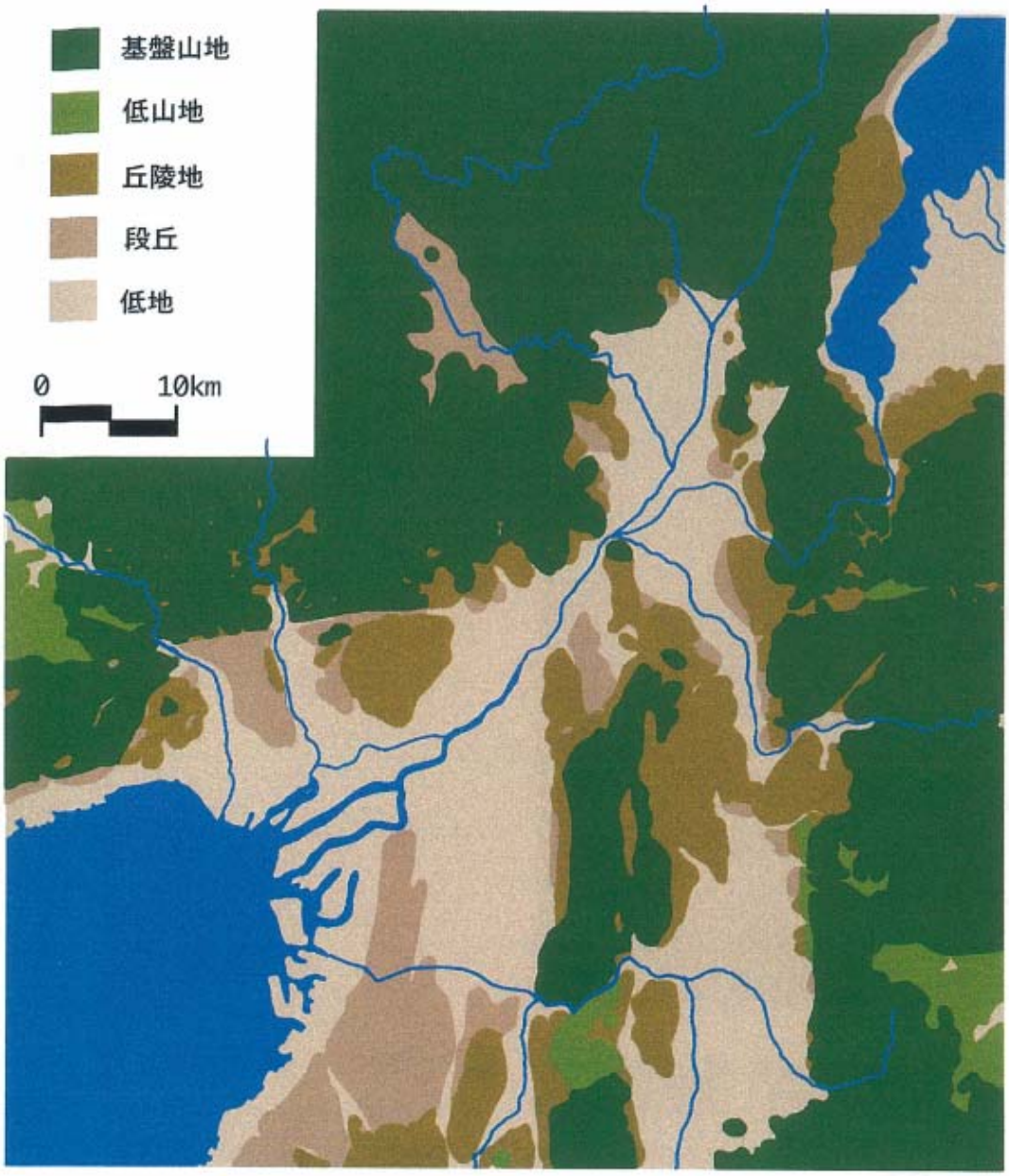


図２　京都盆地の位置と周辺の地形・地質（石田，1995）

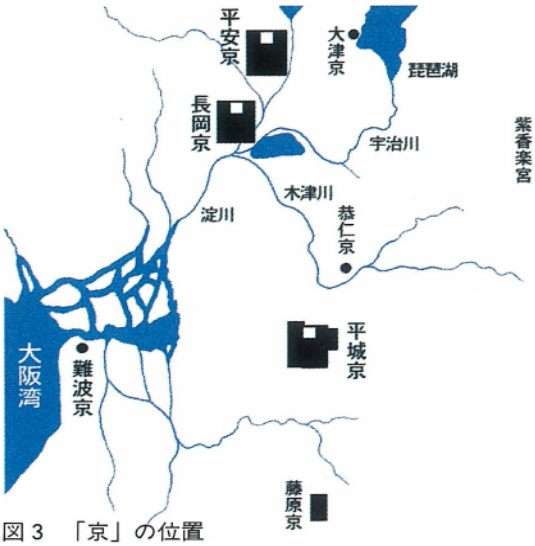


図３　「京」の位置
（西川・高橋，1997）

2.3　土地自然条件－地形－

立地の土地自然条件として、地形に注目した。森（1962）は、平安時代の寝殿造庭園の分布を地質から分析しているが、地質に比べて地形は、地質や土壌など他の土地条件を総合的に反映し、なおかつ可視であるため境界が明瞭である。また庭園全体の骨格を構成する主要な要因と考えられる。土地自然条件としての地形をとらえるためには様々なスケールが考えられる。今回、庭園分布との関連をとららえるために、石田（1995）が作成した京都盆地北部の扇状地地形分類図を用いた。

扇状地地形図は、縮尺１：2,500地形図をベースとし、扇状地の比高、形成した河川名、形成順序などから、京都盆地を小さな範囲地形面へと区分している。京都盆地は、賀茂川、鴨川、天神川、高野川が異なる年代に作り出した扇状地と、沖積層により形作られている。こうした地形面の相違は、平安時代後期、扇状地上の左京が発展したのに対して、沖積地上の右京は衰退が顕著であったという京の都市構造の変遷にも関連している。また資料として、国土地理院二万五千分の一集成図、土地条件図などを用いた。

2.4　日本庭園の様式

日本庭園の様式は、作庭家・研究者によってさまざまに規定される。ここでは森（1988）の日本庭園の分類を用いた。研究者として、客観的な立場から日本庭園を比

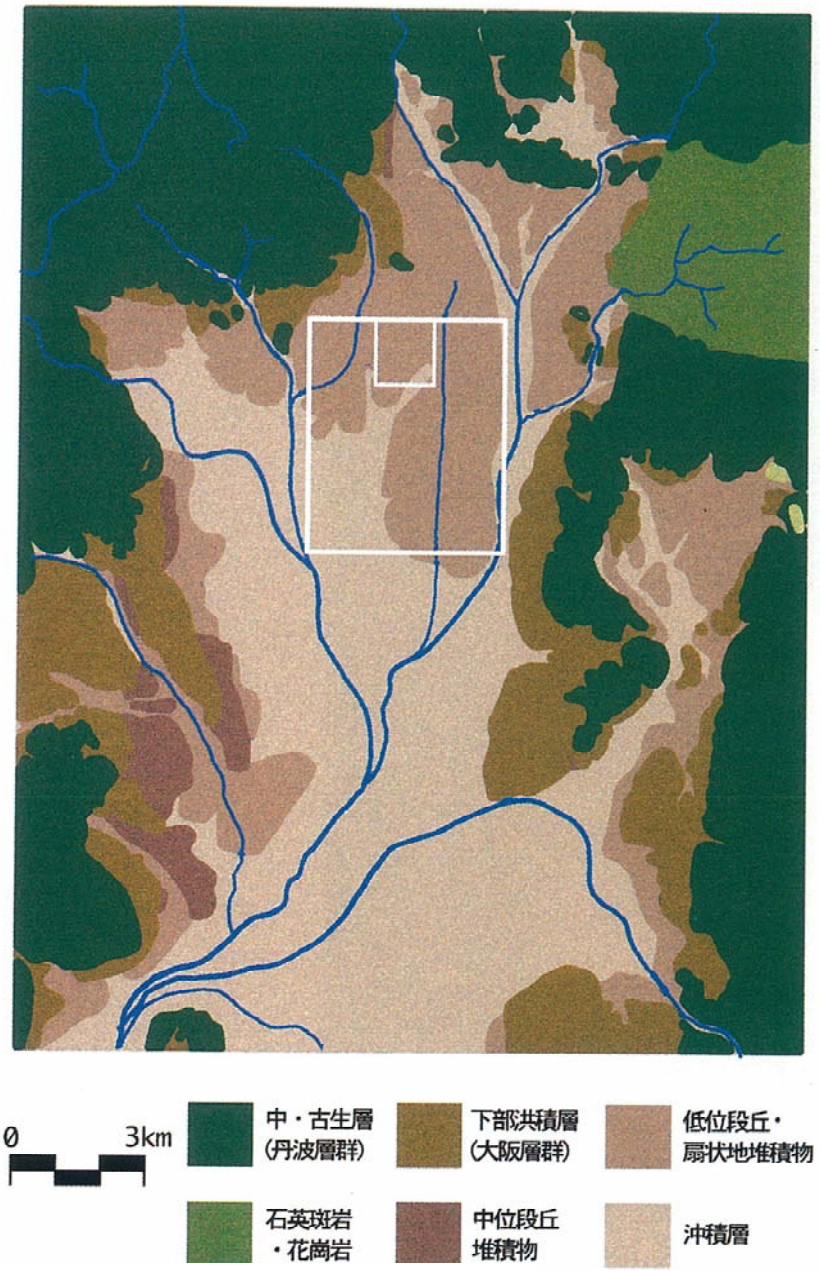


図 4　京都盆地の地質図（石田，1992，1995）
平安京の位置を白線で示す

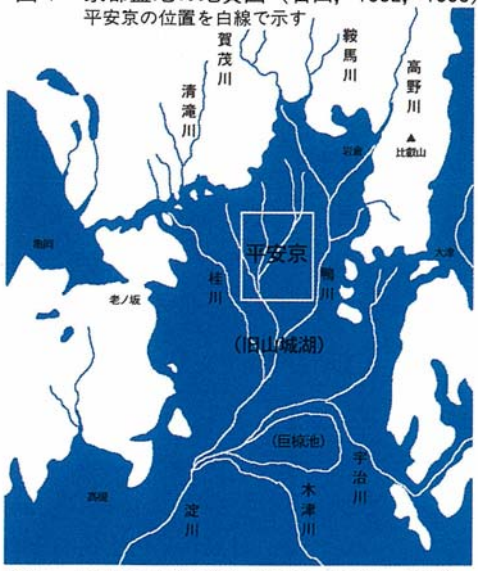


図 5　太古の京都盆地（西川・高橋，1997）

較・分析し、新しい研究成果を含めて、庭園の様式の特徴を網羅的に説明しているためである。これによれば、日本庭園の様式は、①平安時代初期、京内に作庭された寝殿造系庭園、②平安時代中期から後期、郊外の離宮に建設された寝殿造系庭園、③鎌倉・南北朝時代の浄土式庭園・禅庭、④室町時代に再建された離宮、⑤書院造庭園、⑥江戸時代、京内の御所や郊外の離宮に作庭された大規模回遊式庭園と、⑦小規模な枯山水庭園に、大まかに分類することができる。それぞれの時代の代表的な23庭園を取り上げ、地図上に位置をプロット、それぞれの庭園がどのような立地（地形面）上に営まれたかを考察した。

3．庭園分布と土地自然との関連

各時代の庭園様式と地形分類とをオーバーレイし、両者の関連を地図上から読みとった結果、明らかになった各時代ごとの庭園分布の特徴は以下の通りである。

平安時代初期に京内に作庭された寝殿造系庭園は、賀茂川扇状地の低位段丘と泥質の沖積低地の境界に分布している。低位段丘に挟まれた低湿地（神仙苑）や、標高が最も低く比較的時代の新しい扇状地先端（淳和院ほか）などで、河川本流には接していない。

平安時代中期から後期にかけては、寝殿造系庭園は離宮の建設にともない郊外へと分布を広げる。北西側山麓（嵯峨院大覚寺や法金剛院）や南部河川沿い扇状地（宇治平等院鳳凰堂）に位置するものも見られる。

鎌倉・南北朝時代の庭園は、郊外西部の、河川が山を切りひらいた小規模な扇状地に分布している。庭園は、嵐山山麓の段丘面や扇状地段丘面・谷部など、比較的標高の高い位置にある（天竜寺、西芳寺）。

室町時代の書院造庭園は、市域郊外の山麓地に見られ

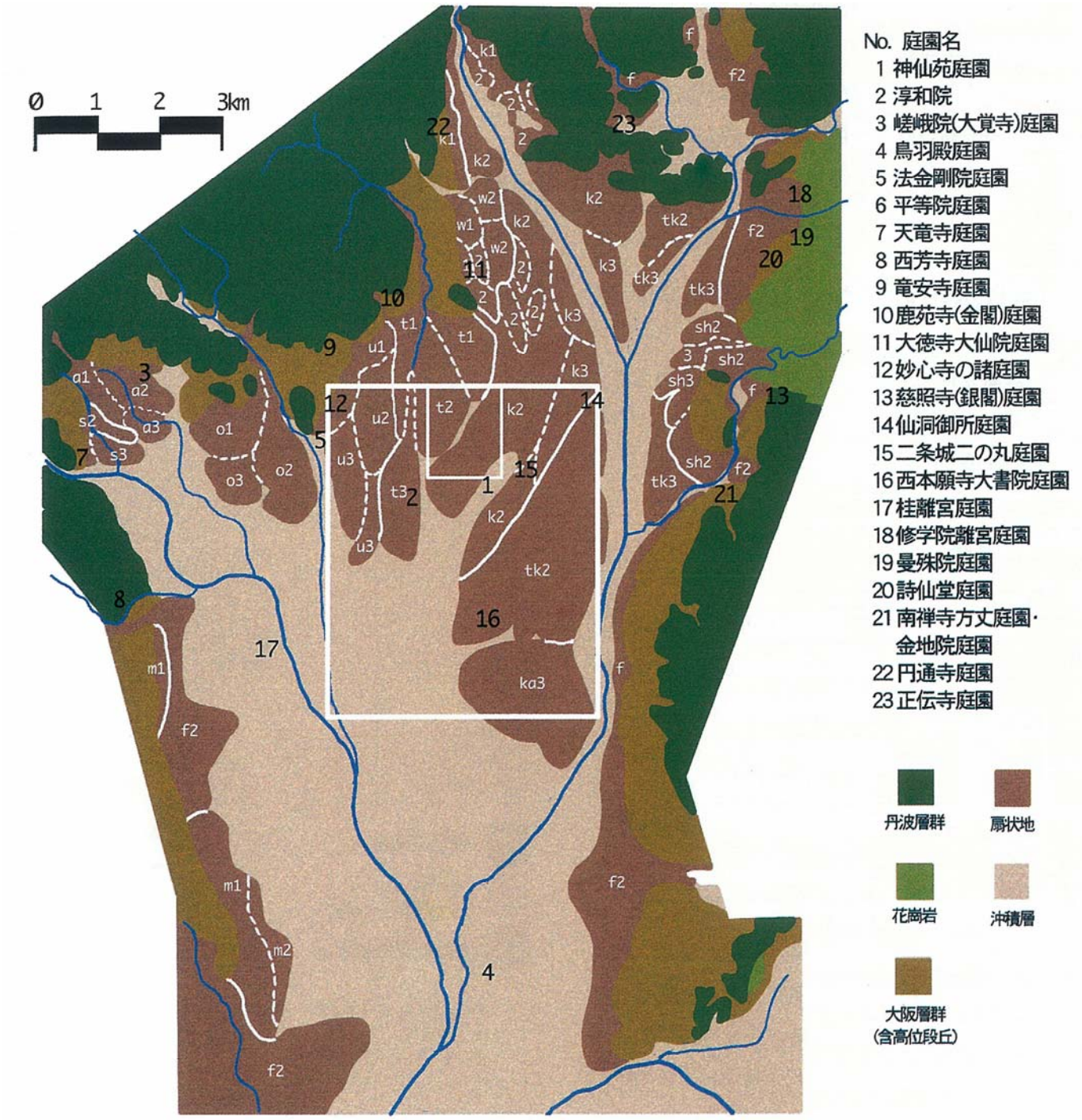


図6　京都盆地北部の扇状地（石田，1995より作成）
s：瀬戸川扇状地，a：有栖川扇状地，o：御室川扇状地，u：宇多川扇状地，t：天神川扇状地，w：若狭川扇状地，tk：高野川扇状地，sh：白川扇状地，k：賀茂川扇状地，ka：鴨川扇状地，f：その他の扇状地。
扇状地には古い順に1～3の番号を振ってある。庭園は森（1988）による。

る。前期は市域北部、衣笠山山麓の丹波層群の山地と大阪層群の高位段丘の間（竜安寺、鹿苑寺金閣）や船岡山北部の中位段丘（大徳寺、妙心寺）の山麓から扇状地扇頂に、後期には東山山麓の小規模な扇状地（慈照寺銀閣）に分布を移す。

江戸時代の庭園分布の特徴は、庭園の規模によって大きく分かれる。この時代に作庭された大規模な庭園は、市域中心部と郊外に二分して存在する。市域内部の扇状地には、仙洞御所、二条城、西本願寺、妙心寺などが、一方、郊外には桂川沿沖積低地（桂離宮）や東山音羽川

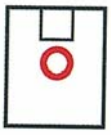
流域山地斜面（修学院離宮）にそれぞれ離宮が建設される。一方、これまで庭園が建設されなかった標高が高い地域に、小規模な庭園が新たに分布を広げている。東山山麓音羽川流域の低位段丘上（曼殊院、詩仙堂）や、東山大阪層群の高位段丘上(南禅寺方丈、金地院庭園)、さらに、より標高の高い丹波層群の山麓・山腹（園通寺、正伝寺）などがそれである。

4．土地自然からみた日本庭園史の解釈

こうした庭園分布と土地自然の関係を元に、さまざまな文献の知見から、〝環境計画〟の視点から京都における日本庭園史の変遷について解釈を試みた。

4.1　中心から周縁へ

4.1.1　中心



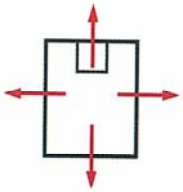
平安時代初期の寝殿造系庭園は、京の中心部、賀茂川扇状地の比較的標高の低い扇端部分に分布している。森(1962)は、平安京内の寝殿造系庭園群と地質分布との関連から、これらの庭園がもともと扇状地伏流水の湧水や池沼ができやすい立地に分布していることを示した。平安京における庭園は、単に儀式・祭礼や審美性のみでなく、京都盆地の夏の暑さを避ける生活環境の改善の機能が重視されている。そのため新たな都市においてまず最初に住宅に選ばれた場所は、比較的簡便かつ安全に湧水を得やすい敷地であったといえる。

さらに、住宅敷地の規模も初期の寝殿造庭園を成り立たせる一要因となっている。平安京は唐の長安をモデルに四神相応の都市として計画され、町割は一辺方40丈(約120m)と広大であった。南側に緩く傾斜した扇状地上にこの広い敷地があるため、北から水を流したときに敷地南端で高低差を生み出せる。これにより住棟の間を流れ、南側の池へ至る〝流れ〟を容易に生み出すことができた。

平安時代初期の庭園は、平安京の扇状地の２つの特徴－豊富な伏流水という水資源と南向きの地面の傾斜－を、高床式の寝殿造建築と敷地規模によって、生活に欠かせない「実用の場」としたものと考えられる。土地自然条件に則った〝自然発生的な〟庭園ということができるだろう。

図７　平安京内地質分布並びに主要庭園位置図(森，1962より作成)
１：淳和院，２：朱雀院，３：神仙苑，４：冷泉院，
５：高陽院，６：河原院

4.1.2　周縁



平安時代後期になると、京内は都市開発や戦乱によって荒廃しはじめ、とくに沖積低地上で地下水位の高い右京の荒廃は顕著であった。京内外の境界が不明瞭な平安京は、新たな土地を求めて東の境域外に拡大しはじめる(法成寺や防鴨河使の設置)。同時に

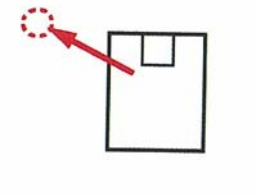
京内の扇状地の水資源も枯渇しはじめた。この時期、庭園（離宮）は湧水（快適な生活環境）を求めて郊外、京の周縁へと分布を広げる。

郊外に建設された離宮の庭園は、嵯峨院大覚寺や法金剛院など、湧水に恵まれた北西の山麓地に多く見られる。湧水が流れ出る山麓の、比較的平坦な土地が利用され、大規模な池が造成されることもあった。

京都南西部郊外では、当時水運の要衝であった宇治に平等院鳳凰堂が造られる。透楼（ピロティ）や河川から越流して池に流れ込む水など、河川も庭園の水資源となっている。しかし当時洪水は、人間が制御しうる対象ではなかったと思われる。平等院は、扇状地扇端の奥まった場所に位置し、激しい洪水を避けうる地形的に安全な立地に造られていた(松浦，1997)。こうした安全に河川の水を庭園に利用できる恵まれた立地は、このほか鳥羽殿庭園など以外にそう多くはなかったと思われる。

4.2　回転

4.2.1　西へ



平安時代後期、庭園は湧水を求めて郊外山麓へと移動したが、この時期の庭園の移動には、当時の宗教的背景も少なからず関係すると思われる。平安時代大陸から伝来された浄土教は、西方極楽浄土を理想郷とする仏教である。この仏教思想を庭園様式に取り込み、曼陀羅の世界観、理想世界を庭園の景観構造のなかに具現化したものが浄土式庭園である。

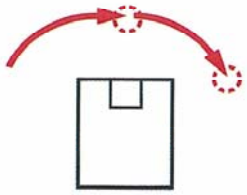
浄土式庭園の特徴の一つは、庭園構造が軸を獲得したことと、庭園の軸と方位とが関連づけられることである。施設、庭園配置の中心軸がより強調され、ある固定された視点から庭を望むのではなく、軸に沿った視点の移動にともなう庭の見え方、感じ方の変化が意味を持つようになる。さらにその軸が池を貫いて西方へと向けられることで、方位が宗教的な意味を持って顕在化する。こうした作庭への姿勢は、続く時代に自然風景を抽象化していく禅苑への布石とも考えられ、また庭園を外部環境へと位置づけていく姿勢の現れともとれる。

このような理由から、西を拝み奉る方向、西に高い地形の立地が浄土式庭園（実際には、その手法が確立した次の時代の庭園）の立地として選ばれたのではないだろうか。京域西部の山麓地の小規模な扇状地に位置する西芳寺、天竜寺は、鎌倉・南北朝時代にかけて浄土式庭園から禅宗の庭園、禅苑への移行したものととらえられる。ただし、京都以外の浄土式庭園では西という方位ではなく、山岳への見なしが強調されたようである（たとえば、奥州平泉の庭園群、本中，1993)。

もう一つは山麓高低差の利用である。禅苑では自然風景が抽象化され、事物の内面、精神が重要視されており、簡素な生活のなかで悟り、無の境地を求める当時の為政者（武士）のライフスタイルにも適合していた。

なかでも、夢窓国師の作庭による西芳寺と天竜寺は、前時代までの山麓の庭園に比べて、敷地の高低差を積極的に利用し、滝口、立石などに利用している。西方遥拝の思想がもたらした地形への意識など、標高差の利用のきっかけと考えられるが、確証はない。浄土式庭園では一軸であった視点の移動も、こうした禅苑では標高差に合わせて多様となる。しかし小規模な扇状地ゆえ、土砂崩れなどの危険が伴い、また湧水の枯渇も生じている。意図せずに〝枯山水〟の萌芽に関与したとも考えられる。

4.2.2　北へ



室町時代になると、平安京は再び政治・文化の中心となる。室町時代前期の郊外の庭園は、平安時代後期に造営された郊外の離宮の遺産を再び活用して造られた。前時代の作庭の影響から、敷地も緩傾斜地のみでなく高低差のある山麓地へと拡大され、池以外にも標高差を利用した滝や流れがつくられた。こうした標高差の利用とともに、視点も高さを獲得するようになる。たとえば、鹿苑寺金閣などにみられる建築の高層化は、庭園を眺める視点の立体化、多面化を生み出していく。

4.2.3　東へ

室町時代中期には東山山麓が文化的な中心となり、西芳寺を範として東山殿、慈照寺銀閣が建設される。地形を用いた立体的で多面的な構成が確立された時代にあたり、慈照寺についても禅宗の理想郷・精神的な空間を地形を活かした庭園構成のなかに実現できるよう、意図されて土地選定されたと考えられる（あるいは東山は、月をめでる風習、特に秋の月の出と関連があるかもしれないがこれも今のところ推測にすぎない)。

4.3　再び中心へ－新たな様式の萌芽－

4.3.1　京内の変化

室町時代、京郊外で庭園が造られると同時に、京内では次の時代の庭園を生み出す社会・文化的な変化が生じている。政治的中心は再び平安京に移るが、都市構造は平安時代を継承せざるを得なかった。このため、京の都市域全体の規模や一つ一つの町割の大きさは変化しなかったが、室町時代には、かつて大邸宅が建っていた一つの敷地をいくつかに分割するような「ミニ開発」が行われた。

4.3.2　建築の変化

一方、大陸から新たな文化が伝来したこの時期、ライフスタイル、特に住宅建築様式にも大きな変化が生じる。住宅建築様式の最も大きな変化は、生活空間の居室割にある。これまで寝殿造建築では建物すべてが公共空間で、御簾や几帳、屏風などの可動式の間仕切りで私の空間を分節していたのに対し、書院造建築では建物内部を壁で分節、居室ごとに公私、ハレとケの空間利用を区別するようになる。この建築形態の変化の結果、建物北部には日常的な、プライベートな空間がとられ、さらに小規模の部屋へと細分されるようになる（稲次，1995)。

4.3.3　新たな庭園様式の萌芽

上記のような京内の建築の変化は、庭園様式に少なからぬ影響を与えた。平安時代、京内の寝殿造庭園の南庭には、池泉と白砂平庭の両方がつくられてきた。しかし、京都再開発にともなう敷地の細分化によって、両方ともに残す敷地の余裕は無くなり、池泉か白砂平庭の選択を迫られることになる。武士の屋敷庭では、池泉を継承し建屋前面に池、島、築山を引き寄せた安土・桃山時代の庭園様式がとられる一方、寺院塔頭では白砂平庭を抽象的に表現する枯山水の技法が、この制約から生まれることになる。

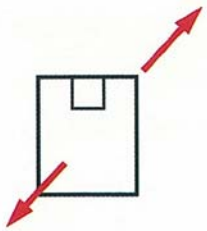
一方北庭は、プライベートな小部屋から眺められる庭の一部分が点景として重要視され、さらにそれらの部分を全体として連続させて見せる技術、方法論が必要となった。この際、いくつもの点景を連続した一つのシークエンスとしてまとめあげる考え方などが用いられた。

さらに、室町時代から江戸時代にかけて、屋敷内の公私の区別はさらに明瞭になり、それらをつなぐ庭の機能も複雑になる。「書院」、「数寄屋」、「草庵」という「公」「公／私」「私」の 3 つの異なる空間を組み合わせた数寄屋建築の出現は、それぞれに対応する異質な庭園の存在を要求し、なおかつそれをつなぐ技術を必要とした。こうした空間をつなぐ庭として、茶庭の露地のような機能を持った庭が出現する。「異質空間の連続性」の技法は、のちの回遊式庭園の基本的構造である「見えかくれ」として継承される。

このように、室町時代京内の庭園では、社会的・文化的な制約によって新たな技法が生み出されてきた。これらの技法はこの後、江戸時代に、自然条件と庭園との新たな関係を生み出していく。

4.4　改変と解放

4.4.1　改変－回遊式庭園－



江戸時代は、室町時代平安京中心部で萌芽した新たな庭園様式が確立する時代である。新たな庭園を土地自然条件との関連から整理すると、 2 つに分けられる。一つは、土地自然条件を「改変」し、新た

な立地を獲得した、回遊式庭園である。江戸時代には大規模な土木技術が発達する。特に治水・砂防技術の発達は顕著で、これにより、土地自然条件が改変され、新たに作庭可能な立地が見出される。たとえば、水資源が枯渇した京内に導水したり、自然には存在しえない山頂や山腹に導水して池を造成することが可能となる（修学院離宮）。このようにして造られる庭園の多くは大規模で、その敷地の中には、異質な空間が複数存在し、それを回遊する様式となる。またそれ以前は危険であった立地にも庭園が作られた。たとえば桂離宮では、洪水の被害を未然に防ぐ治水・水防技術（桂垣や高床式の建築物）が作庭に取り込まれて、永続的な造営が実現している。

ただし、大規模土木技術が行使できる人間は限られる。そのため、こうした庭の存在自体が権力の象徴となっている場合も多く、小石川後楽園や金沢の兼六園などは市井への水供給を制御する役目もになっていた（藤井, 1992）。

4.4.2　解放－枯山水庭園－

もう一つは、土地自然条件の束縛からの「解放」である。江戸時代、庭園はこれまで庭園分布が見られなかった、標高がより高い扇状地や山麓、さらに山腹へと分布を広げている。これらの庭園の多くは、枯山水庭園である。室町時代後期から江戸時代に作庭手法が確立した枯山水の庭園は、立地選定に際して土地自然条件、特に湧水には束縛されない。水の導入が困難な立地や、山腹、尾根部にも作庭が可能である。そのため、庭園の分布範囲は一気に広がり、〝庭、山に登る″結果となったのである。

ただしこれらの庭園も、完全に周囲の土地自然条件から自由に（それを無視して）作庭されてはいない。これらの庭園に共通する土地選定の基準、庭園と土地自然条件の新たな関係は、庭園からの眺め、「借景」という外部との視覚的な結びつきである。園通寺、正伝寺などは、比叡山への視線との関係によって土地と結ばれている。

おわりに

このように、京都の土地自然条件は、多様な日本庭園の様式を生み出し、育んだ一つの重要な要因と考えることができる。以上の考察をまとめると、

⑴京都の日本庭園の様式は、土地自然条件と密接に関連しており、その変化には土地自然条件を克服する土木技術や文化の伝播、発想の転換が関与していた。
⑵長い間、日本庭園の立地として水を利用しやすい土地が選ばれ、とくに湧水は重要視されてきた。
⑶その結果、日本庭園の変遷は、①京内の扇状地先端、②郊外の扇状地へと移動し、③多面的な空間構成や庭園概念の抽象化などのプロセスを経つつ郊外山麓地を西、北、東へ時計回りに分布を変えていった。
⑷江戸時代には土木技術が発展して、土地自然条件の〝水″の制約が人為的に克服され、京内外で大規模な開発に支えられた回遊式庭園が出現した。山腹や洪水の危険を伴う河川沿いの土地が、新たな庭園立地となった。
⑸一方、室町時代以降の京の都市域再開発、敷地細分化に伴って萌芽した、水を必要としない新たな庭園様式、「枯山水」は、土地自然条件に束縛されず敷地を選ぶことができ、山腹・山頂にまでその分布を広げた。ただし水から自由になった庭園は、代わりに視覚的な拠り所を土地自然条件に求めるようになる。

本論はあくまで代表的な少数の庭園に基づいて、通史としての日本庭園の変遷を立地との関連から概観したのみである。そのため内容の検討は決して十分ではなく、議論の客観性、学問的な有意性を得るには、なおより多くの検討が必要であることはいうまでもない。あえてこの場をお借りして発表させていただいたのは、自分自身の教育活動のまとめとともに、諸先生方にご高覧頂き、ご批判ご指摘いただきたく思ったからである。今後、この内容について良い一層の検討を加え、論証を重ねていきたいと考えている。

一方で、今回のように土地自然条件との関連に基づいて庭園やオープンスペースの様式を整理する方法により、庭園・オープンスペース群の歴史的経緯や枠組みを把握したり、地域間比較することが容易になると考えている（篠沢・武内1994）。幸いにも本論を引き継ぐ形で平成８年度から３ヶ年、「琉球の庭園・オープンスペースの様式と立地特性との関連」というテーマで塚本学院教育研究助成いただいており、その有効性を検証中である。この成果についても追ってご報告したい。

最後に本文をまとめるに当たり、平成７年度塚本学院教育研究補助費の助成を受けたことを記し、重ねて感謝したい。

参考・引用文献

浅野二郎（1988）：講義録造園史－浅野二郎教授退官記念－．212 pp.
石田志郎(1995)：自然をうまく利用した都市づくり－京都．*In* 大場秀章・藤田和夫・鎮西清高編（1995）：日本の自然．地域編　近畿．岩波書店．東京．36-52.
稲次敏郎（1995）：庭園倶楽部－日本庭園の「ありやう」を求めて－．学芸出版社．263pp.
川添登（1969）：日本の庭園－江戸の庭園を中心として－．*In*　川添登（1969）黒潮の流れの中で．筑摩書房．東京．115-129.
国土地理院（1995）：２万５千分の１集成図　京都.
篠沢健太・武内和彦（1994）：東京・大阪圏における大規模都市公園の立地と整備内容の特性に関する研究．造園雑誌57(5)，403-408.
進士五十八（1986）：「借景」に関する研究－景観構造ならびに借景思想にみる自然への態度の日本的特質について－．造園雑誌50(2). 77-88.
田中正大（1967）：日本の庭園－SD選書23－．鹿島出版会．276pp.
中根金作（1964）：日本の庭－日本の美と教養－．河原書店．260 pp.
西川幸治・高橋徹（1997）：京都千二百年（上）－平安京から町衆の都市へ－．日本人はどのように建造物をつくってきたか８．草思社．103pp.
西澤文隆（1997）：建築と庭－西澤文隆「実測図」集－．建築資料研究社．123pp.
藤井英二郎（1992）：江戸庭園に見る水系とその生態系の構築手法．エコ・シビルエンジニア読本．土木学会誌別冊増刊77(9)．22-25.
古橋信孝(1998)：平安京の都市生活と郊外.歴史文化ライブラリー36．吉川弘文館．東京．190pp.
松浦茂樹(1997)：国土づくりの礎－川が語る日本の歴史－.鹿島出版会．216pp.
本中真(1993)：日本古代の庭園における警官攻勢に関する研究.京都大学学位申請論文.
森　蘊(1954a)：修学院離宮の復原的研究．奈良国立文化財研究所学報第二冊.
森　蘊（1954b）：文化史論叢．奈良国立文化財研究所学報第三冊.
森　蘊(1962)：寝殿造系庭園の立地的考察.奈良国立文化財研究所十周年記念学報（学報第十三）.
森　蘊（1964）：日本の庭園．吉川弘文館．東京．197pp.
森　蘊（1988）：日本史小百科　庭園．東京．東京堂出版．431pp.